福島第一原発を上から眺める

6 月 25 日、宮本憲一先生らと福島第一原発を視察した。東京電力の視察用のバスで構内を回り、原発建屋前などで説明を受けた。その模様はシリーズ「福島原発をゆく」で紹介している。

写真は 7 月 28 日～29 日に福島大学で開催された「第 4 回 原発と人権 全国研究・交流集会 in ふくしま」で配布された「福島第一原発は今」。全体会最初の報告、東京新聞編集委員・山川剛史さんの「8 年目の福島原発事故」の報告資料でもある。最新の拡大「空撮画像」は、福島第一原発を一望でき参考になる。大きな地図を 2 つに分けて写真に撮ったので、すこし分かりにくいが、第一原発の全体像、原子炉建屋などの位置関係、敷地一杯に並ぶ汚染水タンクなどが眺められる。バスで巡回したときとは、また違った見方ができる。この空撮図からも、とりわけ汚染水タンクへの対応が焦眉の課題であることは明白である。

8 月 12 日にレポートしたように、9 日午後、大阪地裁で開かれた原発賠償関西訴訟の公判を傍聴した。この日は第 19 回弁論であり、「結果回避可能性」原告準備書面 55 が、弁護団によりパワーポイントを使って説明された。準備書面をすこし紹介しよう。

あの過酷事故を引き起こした津波について、「2008 年推計」を取りあげる。これは、東電設計株式会社が 2008 年 4 月 18 日作成したもので、「長期評価」の知見を取り入れ、日本海溝寄りのプレート間津波地震モデルによる津波評価を行ったもの。「2008 年推計」によれば、「敷地高を 5 メートル超える高さの津波」を想定して対策をとっていれば、本件津波による重要機器の機能喪失を防ぐことができた。被告・国は「2008 年推計」を上回る津波が押し寄せたと主張。結果回避可能性が、本件の重要な論点となっている。この地図からも、津波の影響が原子炉建屋に深く及んでいたことを想起させる。

（2018 年 8 月 17 日）